

# 令和7年度 第1回小城市総合教育会議（要旨）

日 時 令和7年10月31日（金）10：00～

場 所 小城市役所（西館2階）大会議室A・B

## 1 開 会（10:00）

（市長）

- 現在、様々な分野で人材不足、後継者不足という状況にある。いつの時代も、人材育成が非常に重要な課題である。昨今のグローバル化や先の見えない国際情勢の推移、AI技術の進展といった我々を取り巻く環境が目まぐるしく進んでいる中で、地域を支える、国を支える人づくりがとても大切である。
- 小城市の子ども達には、自分で自分のことを決めることができる、様々なことに積極的に挑戦できるようになってもらいたい。
- 今日は、忌憚のないご意見をいただければと思う。

## 2 総合教育会議の概要について

（総務課長）

- 資料により、総合教育会議の概要を説明。

## 3 議 事

### （1）学校教育環境について

（市長）

- 教育施設の今後のあり方について、教育委員会として議論をお願いしたい。
- 4月に市長に就任し、6月議会、9月議会において、公共施設や教育施設の今後のあり方について多くの質問をいただいた。人口減少や少子化、様々な施設の老朽化が進む中で、今後の教育施設のあり方をどう考えるのかというものである。
- 基本的な考え方として、現時点ではこうすべきという考えは持っていないが、人口減少や少子高齢化といった様々な環境変化が進む中で、公共施設や教育施設を今後どうするのかという議論は避けることができないし、責任ある行政を進めていくうえでもしっかり議論する必要がある。
- その上で、学校などの教育施設のあり方については、先に結論ありきではなく、まずは、子ども達の教育環境という観点からどういう状況が望ましいか、学校は地域のコミュニティの拠点機能も果たしているので、そういう機能をどうしていくのか、こうしたことを財政的なことも念頭に置きながら、議論していく必要がある。
- 財政的な状況が許すのであれば、離島留学や山村留学といった小規模で濃密な教育を受けることができる環境もあっていいと考える。一方で、地元の話聞く中で、例え

ば少子化により集団で登校する状況がほぼ無く、遠方から送迎している保護者の意見として、学校を統合してスクールバスを運行したほうが安全安心といった声もある。今の状況を守る方がいいという考えがある一方で、保護者の立場からするとまた違った考え方もあり、今の時代本当に様々な考え方ややり方があると思う。

- また、施設の老朽化が進行していることから、学校施設の具体的な整備計画を進める上で、この議論は避けて通ることができない。
- このため、まずは子ども達の教育環境という観点から、ただいま申し上げたことについて、教育委員会で議論してほしい。具体的な議論の進め方は、教育委員会で検討していくことになるが、例えば外部の専門家や市民の皆様にも参加いただき、幅広く議論するようなことも検討していただければと思う。令和8年度中にも教育委員会としての意見をまとめていただき、その後、教育委員会での意見を踏まえて、小城市としてどうするのかという方向性を出していきたい。

#### （教育長）

- 小中一貫校で勤務した経験があるが、様々な形で統廃合の話に20年近く関わってきた。様々なアイデアや財政面もふまえて検討していく必要があるが、子ども達の教育条件が最優先になるので、そこを考えていかなければならない。また、保護者も関わることで、配慮が必要となる。
- 現在、教員の人材不足になっている大きな原因は、特別支援学級が増加していることも要因。少子化により通常学級数は減少しているが、特別支援学級数が増加し、以前と比較しても学級数はほぼ減っていない。この状況は、今からも続いていくと考える。子どもの特性を生かすためにはどういう学校が適当か、小規模がいいのか、特別支援学校がいいのか、様々なニーズに応える必要があれば、個々の教育課程の編成ができる学校づくりをしなければいけないと考えている。
- 大きな学校で学びたい、小規模な学校がいいといった様々なニーズがある中で、例えば小規模校を市内全域から通学できるようにする、この場合登下校をどうするのかといった課題が出てくるが、このようなことをしっかり考えていく必要がある。議会からここ数年質問をいただいております、明確な方向性が具体的にないだったので、教育委員の皆様からも意見を出していただければと思う。

#### （永野委員）

- 現状では、校舎は老朽化し子どもは漸減傾向。ただ、学校の存在は、学齢期の子ども達の教育のみだけではなく、地域の中にある学校であり、大きな存在意義がある。地域の中から学校が無くなると人口減などに繋がるので、可能な限り学校というのはそこに存在して欲しいと考える。
- 今後、学校のあり方を考えていく際に、今の教育課題として不登校の問題がある。現在小城市では、各学校に支援員を配置するなど人的な支援や不登校の子ども達が通うことができる場所を作っていただいております素晴らしい取り組みだと思っている。今後、

一歩進んで、フリースクールを設置してはどうかと考える。不登校の子ども達が安心して通える場所としてだけではなく、その中に様々な人が集えるようにしてはどうか。そこに行けば地域の人や退職した教員など様々な人と関わることができ、関わりから力をつけていくことができる場所があればいいと思う。

(吉田委員)

- 子どもは昔から地域の宝と言われている。その宝を磨いて育てる中核をなすのが学校であり、学校の存在というものは、地域のコミュニティの核であり大きな存在である。
- 学校が担う役割は、基礎基本の学力を身につけることはもちろんであるが、それだけではなく、社会に出て生きていける「生きる力」を育てていかなければならない。
- 市内の学校数が多いのか少ないのか、適切であるのか分からないが、学校の数と校区の見直しを今後していかなければならないと考えており、もう少し早くからこのテーマが議論できればと感じた。
- かつて閉校に携わったことがあるが、その時の地域の方々の学校に対する思い、閉校させるということの重さ、責任感というものを感じた。学校の今後を考えていく上では、地域の方々や保護者の皆さんの意見や考えを聞いていくことも重要であると考えている。

(荒牧委員)

- 私は三日月町のほうから来ているが、地域の方と交わる機会があり、その中で地域の方々が小中学校を本当に大切にされており、子ども達を皆で育てていかなければならない、自分たちもその一助になりたいという思いを感じている。
- 三日月は市内で一番大きな学校で、登下校の問題もありスクールバスを試験的に運行されているようであるが、初期と比較すると利用者が減ってきていると聞いている。保護者の通勤時間とバスのお迎えの時間が合致しない場合が出てきて利用が減っているという話を聞いている。また、スクールバスが巡回バスと共用されているので、お年寄りの方が利用するのに少し不便になり利用が減っているという話もある。
- 子ども達が朝登校したり夕方下校したりする時間帯で、国道が混むので、国道を避けたい通勤者が農道を通ったりとても危険性がある中で、地域の方が随所で子ども達の安全を守られている。
- 離島に勤務していた際に、隣の離島の学校が閉校したことがある。島の人の学校に対する思いは本当に大きくて、文化的な行事からスポーツ的な行事も全て小学校で一緒にする。子ども達の見守りやいろいろな体験をさせてくれる場を準備されて協力的であった。地域の中に小中学校があるということが地域の活性化や地域の人々の楽しみに繋がっている。
- 三里小学校で勤務したことがあるが、三里の地域の方々は、だんだん子ども達が少なくなっていることからいつ分校化されるかひやひやされていた。地域の方々が地域の中の学校というものを大事にされているので、今でも続いているし、これからも小規

模校のあり方について、小城市全体で考えていくことが有効だと思っている。大きい集団では学びづらいといった子どもは、小規模校を選択できるなどと言ったことが考えられるのではないかなと思う。

- 芦刈観瀾校は、コミュニティスクールといって、地域の人と一緒に学校を作っているという実践をされている。これを他の小中学校に広めていく方向性になっていると思うので、地域と学校というものを心に置きながら進めていければと思う。

(飯盛委員)

- 学校環境についてですが、統合、廃校、存続化などありますが、子どもの教育環境を守ることが一番大事なのではないかなと考える。
- 大規模校はいいことだ、小規模校はいいことだと意見はあるが答えが無い。どういう環境にあっても子どもは教育を受けて大きくなっていくので、そこを妨げないような教育を提供していかなければならない。

(白木原委員)

- 本日の会議に臨む前、小城保育園と砥川みのり保育園の訪問に行った。0歳から5歳までの子どもが預けられる保育の教育現場を見ると、昭和の時代は家庭で育ち一定の年齢になると幼稚園、保育園に行くのが大半だった。ところが、社会状況の変化によって、幼児の段階から社会に出る姿を見て、やはり子ども達の教育は、時代の変化や社会環境、家庭環境に合わせて、常に、柔軟に、よりよい環境を作っていくことが大事だと思った。
- 子どもにとって一番大事なことは、少人数学校を維持してでも、子ども達が生まれ育った地域の大人に見守られた中で伸び伸びと楽しく勉強できる環境を提供してあげることではないかなと思っている。
- 私は牛津小学校出身だが、牛津中学校に入学する際に砥川小学校と一緒になった。私だけの意見かもしれないが、一緒になった時は怖かった。砥川小学校出身の方々もなかなか馴染めなかったような気がする。子ども達にとって新しい環境で勉強するということは、かなり精神的な負担もあるのではないかなと思う。
- 以前市長が小城市をグローバルな街にしたいと言われていたと思うが、外国人も移住者も安全に丁寧に教育を受けることができる優しい小城市になれば、人口も増え街も活気づくのではないかなと思う。
- 限りある財源は有効に使って欲しいが、教育には時間がかかる。子ども達はいつ開花するか分からないので、点ではなく線で見えて欲しい。財源も大事だが、理念も持っておく必要があると考える。

(梶原委員)

- 小学校は自分の足で通える範囲に学校があり、中学校は自転車で通えるところにあって欲しいという思いがある。

- 子ども達が成長するためには、切磋琢磨していく環境、社会性や協調性を身につけていくためのある程度の児童生徒数が必要であると考え。その数がどれくらいかというのは分からないが、1つの学校、1つの学年での児童数も検討する必要があると思う。
- 平成 18、19 年に県立学校の募集定員や学級数、統廃合や学校の新設を担当する県庁の教育総務課で仕事をする機会があった。その時に考えたことは、少子化というのは当然分かっている中で、高校に入る年齢はある程度先の見通しがきくので、そういったことをふまえながらクラスの適正規模を先に検討した。結果的には、4～6 クラス規模の学校が、適正規模という結果となった。これをふまえて、地域の子どもの数や志願状況を見込みながら統廃合を行った。
- 再編統合の例として、鹿島高校と鹿島実業高校を統合し新鹿島高校となった。この場合、校舎は別で部活動や学校行事を一緒に行っている。他にも、白石高校と杵島商業高校、嬉野高校と塩田工業高校、伊万里農林高校と伊万里商業高校などの例がある。
- 4～6 クラスが適正と申し上げたが、3 クラス規模で成り立っているところも数校ある。
- 子ども達にとって教育環境の中での適切な人数を検討する必要があると思う。これまで学校訪問する中で、小規模校は小規模校のすばらしさ、大規模校の子ども達のたくましさがあった。それぞれの良さがある中で、良さの部分だけではなく将来にわたって学校をどのように維持していくのかということを考えて場合に、先ほど申し上げたようなことも頭に置かなければならないと思う。
- 地域住民の目線で考えると地域内に学校があれば大きな地域の活性化に繋がると思う。先ほど再編統合の話をしたが、地域の方は反対される。どこかで将来の子ども達のことを考えながら、この学校は地域にあるべきか、あるいは再編統合すべきかということも考えていく必要があるのではないかと考える。

(市長)

- 委員の皆様方の意見を聞かせていただき、非常に重い重要なテーマであると改めて考えている。
- この話は論点がいくつかあって、地域の人間から見ると学校は地域の拠点なので、これが無くなるということはとても大きな話であり、それはやめてほしいというのが恐らく大方の皆様の思いだと思う。一方で、子ども達のためにどうなのかということを見ると、いろいろな教育環境、多様な教育の機会っていうのがあったほうが良いということもある。子どもの将来を考えた時にどうかということに重きを置いていかなければならないのかなということを感じている。現実的な課題として、このバランスをどう取っていくかということが大事であると考え。先の話になるが、このような環境をどう実現していくかという論点の時に、例えば、先ほど梶原委員からも県立学校の話があったが、私も県立学校の再編にそれなりに関わっており、よく承知しているが、結果的に統合しているが地域に校舎は残っている。先ほど伊万里や鹿島の話

があったが、学校としては1つになっているが、校舎は残ってそれぞれ個々に教育が行われている。太良高校も性質が変わり、どちらかというと全県から不登校的な方に来ていただく学校になった。確か厳木高校もそういった方向になった。最初は、本当に数が半分ぐらいになるぐらいの議論からスタートしたが、最終的には、校舎が何らかの形で残るという形に落ち着いたのが県立高校の再編の状況。なので、財政的なものもかかってくるが、学校としては1つにはなるものの、拠点としてはずっと残るというような選択肢もあると思う。

- 今までの考え方だと、例えば公民館であれば1つの施設に対しフルセットですべての機能を平等に備えておかなければならないという考え方で整備されてきた。しかし、これは非常に非効率で、地域に応じて必要な機能を最低限の施設で存続させるやり方もあると考えている。こういったことも含めて、様々な可能性を議論できればと思う。

#### (教育長)

- 委員の皆様の意見を聞くと、コミュニティがキーワードになっている。令和8年度から全小中学校をコミュニティスクールにする方向で話を進めている。これは、もともとある地域の教育力を生かしていくということを含めて地域との関係を薄れさせないことにも繋がる。
- 現在の大きな課題は、「学びの多様性」である。不登校で学校に行かなくても学べる環境にある中で、いろいろな子どものパターンがあって、その学びの多様性を、公的な機関でどう対応していくかというのも検討しなければいけない。先ほど出たように高校では不登校の子どもを受け入れるところがあり、コミュニティもだが、子どもを主にすると様々な策を練ることができる。例えば小規模校であれば、少ない人数であればコミュニケーションを取ることができるということであれば、区域外からそこへの通学を認めていくといった特色ある学校づくりの中で特性を出す必要も出てくるかと思う。
- 子どもの教育条件を考えていく上で、100人いたら100通りの考え方があるが、最大公約数で考えていく必要がある。
- 梶原委員の話にもあったが、学校教育法施行規則の中で標準学級数が小学校では12学級以上18学級以下となっている。小城市内では、ここから多い少ない含めて外れているところがある。先ほど述べたように特別支援学級の増で学級数が多い状況。三日月小学校は33学級ある。ほとんどの学校で空き教室が無い状況なので、部屋、人など様々な問題があり差が出ている状況。そういったところも含めて、学びの多様性やコミュニティ、保護者等いろいろなことを考えながら今後の学校のあり方を考えていく必要がある。

#### (市長)

- 先ほど論点がいくつかあるという話の中で1つだけ漏れていたが、施設という面から見たときに、例えば学校が学校教育という機能だけという施設ではなく、公民館や社

会教育施設などと複合的に施設として置くという考え方もある。1つの箱の中に様々な機能を持たせて、その中に学校という機能があるというようなやり方もあると思う。市全体を見ると様々な施設があって、その維持管理費が相当圧迫していることは間違いない。このため、施設を維持していくものとして1つの箱の中に様々な機能を持たせるという考え方も選択肢として含めて議論できればと思っている。

(永野委員)

- 私は芦刈出身だが、小中一貫校になる前に、学校が牛津と合併するなど地域の中で話されており、これで芦刈には何もなくなってしまうといった話もなされていたが、その後小中一貫校を整備していただき、住民としては良かったという話をしていた。市長の話にあったように、いきなり学校が無くなるのではなく、1つの場所の中で、こちらには学校が存在し、こちらには地域の様々な団体が活動しているといったことも有りだと思う。
- 最後の勤務先が嘉瀬小学校であったが、地域との連携をととても密にされていて、学校の中にコミュニティルームがあり、そこで毎週水曜日に老人会が活動され、活動後に各学級で給食を摂られたり、草刈りされたり子どもの話を聞いていただいたりと、様々な関わりがあった。学校内にスペースがあれば、まず学習が第一であるが、そこで例えば何かの稽古などがあり、子どもがプラスアルファの学びや体験ができる場として楽しいことができるのではないかなと思う。

(吉田委員)

- 学校訪問で学校の様子や子どもたちの様子、地域の様子も含めてある程度理解できるが、地域住民は、例えば芦刈町の方が小城町の学校の様子、三日月町の方が三里の学校の様子をどれくらい分かってあるのかというところが気になるところである。
- 保護者も含めた地域住民の方たちが、小城市内の学校全体の様子が今現在どうなっているのかということを知る機会があってもいいのかなと思う。そういう中で、うちの子どもは大規模校より小規模校がいい、小規模校より大規模校で揉まれたいといった保護者の声もあると思うので、そういうことを受け入れていけるように、学区の校區割を柔軟にして、ある程度学校の選択ができるような方向になるのも1つの方法ではないかなと思う。

(荒牧委員)

- 以前、開かれた学校ということで、学校を開放しようという取り組みがあった。最近では、不審者対応等で閉ざされた方向にあるが、セキュリティをきちんとされた上で、先ほど話に出たような学校の中に地域の方の会が入ってもいいのではないかなと思う。小城市全体でそういうことを考える機会があってもいいなと感じた。
- 学校ごとに育友会の組織として大規模校が小規模校を見学するとか、小城町内に4校あるので、今日は違う学校に行きましようなど、吉田委員の話を聞き学校間の垣根を

取って参観できる機会があればいいなと思った。

(教育長)

- 振り返れば、6月の教育の日は、市内全域フリー参観デーだった。誰がどの学校に行ってもよいという扱いで設定していた。多くの様々な人がそれぞれ行きたい学校に行き参観していた。しかし、新型コロナでそれが狭くなり、学校がナーバスになった部分もあって制限していた。改めて、開かれた学校、解放できる取組は今後考えていく必要がある。自分の校区だけではなく他の校区のことを知る機会を設けなければならないということを思った。
- 新型コロナ等でいろいろなことが薄れてきているので、コミュニティスクールを推進しようと今準備を進めているところ。学校もスタッフが変わるといろいろなことが変わるので、そういった意味では、地域の方々が学校にどんどん入れるような仕組みづくりが必要であるということで、芦刈観瀾校のコミュニティスクールの例を取りながら準備している。

(総務課長)

- 市長に確認ですが、今施設のあり方について、どれくらいの長い目で見ていくのかということをお話しいただければと思います。

(市長)

- 施設のあり方を考えるときに、時間軸をどう考えるのかというところで、現実の問題を申し上げると、学校の施設整備そのもので順次整備していくので10年、20年スパンの話になる。なので、今こうしようと決めても来年からそうなる訳ではない。
- おそらく20年先ぐらいを見据えたときにある学校の整備をどうするのか、どこまでやるのかという議論になってくると思う。
- 大きな方向性としてどうやったほうがいいのかという話と個別の施設整備をどうしていくのかという話が出てくるので、時間軸は、私の感覚としてはおそらく10年先、20年先の話だと思っている。逆に言うと、10年20年先の子どもの状況やあるいはその時の社会情勢などもある程度予想しながらこういう方向がよいのではないのかという議論になると考える。
- もう具体的な整備をしないといけない時期に来ているので、その見通しが無いと着手できない。フルスバックで50年持つ施設を造るのか、仮にどこかと一緒にするのであればその分のキャパを確保する必要があるので今より大きい学校を造らないといけないといったことが出てくる。そういったことを考えないといけないので、この議論を行わないと先に進めないため、今日こういう形でお願いしたところです。

(教育長)

- 今日は、学校教育環境という話をきっかけに行っているが、社会教育や既存の施設を



どう有効活用していくのか、市長部局のまちづくりなど様々なことが絡んでいるので、教育委員会でも議論するが、市長部局と議論し合わせていくということがなかなか難しい部分があったので、ここから突破口を開いて10年20年で見える化になればいいということに期待した。スタートとして学校のあり方というのは当然出てくるが、地域のコミュニティとしての施設も生涯学習課が持っている施設もたくさんある。まちづくりを進めていく上でのことも考えながら、有効かつ効果的に財政面も考えていく必要があるからこそ、こまごましたところから議論していくべきであると考えているので、今回はいいスタートになったのかなと思う。これから先が一番重要であると感じた。

（飯盛委員）

- 冒頭に、市長より令和8年度中に何かしらの方向性をという話があったが、10年20年先のどのぐらいの方向性を示す必要があるか。

（市長）

- 現実の問題として、すでに学校施設整備が始まっている。具体的に言うと、桜岡小学校については、基本設計に入っている。これを止めるという話ではないが、仮に桜岡小学校にどこかの学校の生徒をもってくるという話になると、今の規模では全然足りなくなる。だからどうしていくのかということを議論しなければならないということが今の状況である。
- 例えば20年後の状態を見たときに、この学校はここまで持たせよう、方向性として将来的に統合は避けられない、あるいは統合しないが規模としては小さくなるので複合施設的に公民館などと一緒に箱を考えていくなど、そのような方向性が出せないかなというイメージである。難しい課題をお願いし恐縮であるが、そのイメージが無ければ整備していくことができない。
- この施設を50年持たせるのか、20年持てばよいのかで整備の方法が変わってくる。どこから生徒を持ってくるのであれば規模そのものを考え直す必要があり、場合によっては場所も変える必要があるかもしれないということもあり得るので、このような議論をしっかりやっていかなければならないということが今回の提案である。

（梶原委員）

- 高校の場合を持ち出してよいか分かりませんが、学校の教育方針に合わせながら子ども達がそれに合わせていくというスタンスかなと思う。今いろいろな意見を聞く中で、最終的に子ども達をどう育てるかが一番大事かなと思うが、子ども達に目をやると小規模やフリースクールという形が当然出てくる。施設など将来的な事を考えていく中で、学校あって子ども達がある、あるいは、子ども達を主に伸び伸びと育てるためには、どういう環境を作らなければならないのかという最初のスタンスをある程度決めておかないとなかなか難しい気がする。考え方があって先に進むのかなという気がする。

(市長)

- これからの議論の中でいろいろな方向性が出てくると思うが、1つの答えではなくてもいいかなと思う。スタートは、子ども達の視点、子ども達のためにどういう教育環境を作ってあげた方がよいのかということが大前提で、そこからスタートしていただきたい。お金が無いからとかいう話ではなく。そこからスタートしていただき、いろいろな考え方がある中で現実的な答えというものを求めていかなければならないので、いくつか、こういうやり方もあるのではないかと、もし仮に再編が避けられないとすればこういうことを合わせてやってはどうかなど、方向性が出てくればいいのかなと思う。

(白木原委員)

- 今までの話を聞いたら、本当にこういう問題は時間的にも財政的にも体制的にも大変なことだと感じる。市町村は、様々な意見がある中でそれを集約しベストなところでゴーサインを出されると思う。
- 私見だが、今までの意見を聞く限りでは、統合や施設という時に子どもがなおざりにされないかということを感じた。やはり子どもは、小学校、中学校があってそこに通うわけであるが、時代背景によって場所や環境が変わると子ども達が混乱することが目に見えているのではないかなと思うが、逆に、順応性を今の子ども達はたくさん持っているのかなとも思う。ただ、その中でいじめや不登校が発生した場合には、そういう物質的なものではなく精神的なものが関わってくるので、まず子どもを第一に考えていかなければならないと感じた。

(市長)

- 教育施設や環境の話はここまでで、今後のいろいろな議論の進め方については、ぜひ教育委員会の中で事務局も含めて議論していただければと思う。
- 全く違う話になるが、一度申し上げたことがあるかもしれないが、今私自身いろいろな仕事をしていく中で、外国の方と関わる機会が多い。外国の方、特に外国の高校生などとの交流事業をやる中で、総じてとにかく自分の意見を言う。物怖じしないというか、とにかく自分の主張をする。一方で、日本の子ども達は、全員ではないが、総じてシャイである。なかなか自分で言えないというのを感じている。私自身少年サッカーの指導を15、16年ぐらいしたので、小中学生を相手にしてきたが、同じである。自分の考えをなかなか言い切れない。そこがやはり日本の弱いところかなと感じる。なので、自分の考えを自分の言葉で言えるような人に結果としてなっていると思うが、学生時代からそのような方になってもらってもいいのではないかなという感じを強く思っている。そういうことも含めて、どのようなアプローチが必要なのかと思った。
- 今は多様性の時代なのでいろいろなバックグラウンドを持つ人たちが周りにいっぱいいるし避けられない。そういう中でたくましく生きていくことが求められるので、

そこをどう考えていくのかということもいろいろなところで議論いただければと思う。

(教育長)

- 今市長が言われたことに関しては、今からの子ども達の目指す力だなと思っている。市長にはぜひ少年少女の声大会の子ども達の声をぜひ聞いていただいて、大人の方は襟を正すことが多々あったので、ここ数年来予選をしているところもあるが、子ども達は相当いい思いをしっかりと語ることができるので、ぜひ聞いていただきたいと思う。
- この話は、学校にも地域の方々にも話をするべきところかなと思うので、思いをしっかりと伝えていきたいと思う。

4 閉 会 (11:26)